
本と猫と少年と、

政咲（改）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本と猫と少年と、

【Zコード】

Z6511Y

【作者名】

政咲（改）

【あらすじ】

これは少年Mの何気ない一日。本を読んで、猫と絡んで、思いに浸る少年の短い物語。

後期試験前の日は寝る間を惜しんで勉強に励むのが僕だ。親の監視の元で自宅学習の猛威に振る舞わされている。学問に励むこと 자체は嫌いではない。何が嫌かといえば、人の気持ちを理解しようとしない親の態度だ。一日10時間以上は机に向かって塾のテキストや学校で渡された問題集の山を処理している。そこに親の余計な手助けが入らなければ、このことに何の文句は無かつただろう。

両親は共に学校の教師を務めている。母は高校。父は中学校。この両親は勉強に励む僕を見て「これだけで良いのか?」と言つては両親一押しの分厚い問題集を渡される。そこに反論の隙は無い。現に僕の成績は卒業を間近に控えていながら低下の兆しを示している。

僕にはどうしても合格しておきたいと『F高校』いう第一志望校があるのだ。その平均値が馬鹿みたいに高い。そして卒業した先輩の話によると「あの学校は生徒を入学させるという考えが一切無いくらい入試のレベルは高いよ」だそうだ。そしてこの言葉は両親の耳にも届いていた。合格させたいという親の気持ちは伝わってくるが、勉強の山にまた一つ山を加える親を見て「息子を過労死させたいのか?」という思いが僕の中に募る。

そんなテスト前の休日。僕は親に嫌気が指して家を出た。親が用意した問題集に一切手を付けていないことを注意された。それもたちの悪い母親に。どこの親もそういうものだと友人に聞いたのだが、うちの母親は一度僕のことで怒りだすと終わりが見ない。勝手に怒りだしてはグチグチと細かいことに注意し始めて、ついには嘘話まで作つて僕を出来の悪い息子として馬鹿にしてくる。「小学六年の時に名前を書き忘れてテストが0点」なんて馬鹿な嘘をつくのは止めてほしい。我慢の限界に到達した僕は1冊の本を持って家を出た。その本はオグマンティーノ著の『十二番目の天使』というタイトル

の小説だった。学校の図書室でたまたまその本を取り、たまたま隣にいた図書の先生に「その本を選ぶなんて、良いセンスしているねM君！」と熱く絶賛されて、勢いそのままに借りてしまった本だ。正直なところ僕はあまり本を読む方じやない。図書室にはいつもマンガを読みに来ているだけなのに

本を読むとしたら僕は迷わず公園を選択するだろう。僕の近所には『董橋公園』という広い公園がある。公園の中に小さな湖がありその上に大きな橋が架かっている。それが有名な董橋がある。なぜ公園の橋が有名なのかという話はまた別の機会にでも話します。

「えっと…ここで良いかな？」

その湖の近くに木製の丈夫なベンチが置かれていた。僕はそのベンチの上の枯葉を手で払つて力を抜くように腰を下ろした。とても静かな公園だった。九月に鳴くセミの音の他に耳に入る雜音は無い。いつもならマラソンやら散歩で人を見るのだが、今日に限つては1人も見当たらなかつた。これ程までに董橋公園を心地良い場所だと思つたのは人生で初めてだと思う。これで本を読む少年がいれば絵画が何かのモデルになれるかもしれない。

「よし！ 本を読もう！」

覚悟を決めて『十一番目の天使』の最初の1ページに目を落とした。数分前まで数式に目を落としていた僕から見た小説の文字の並びは、少しだけ新鮮に感じられた。世界的童話作家であるハンス・クリスチャン・アンデルセンの『すべての人間の人生が、神によって書かれたおとぎ話である』という言葉が目に入った。深い言葉だと感心しつつ次のページに目を向けようとしたら、僕の靴の上に不思議な重みが感じられた。慌てて足元を見ると、そこに一匹の猫がいた。茶色くフサフサとした毛並みの、大きな猫である。

首輪がついている所からしてどこかのペットなのだろう。大きく丸いペルシェ猫だ。

この猫は僕の靴を前足で踏みつけると、丸々とした自分の体を靴の

上に乗せて横になってしまった。随分と人懐っこい猫だ。読書に勤しむ身としてはとても不愉快な奴だ。

「あっち行け！ シツ！ シツ！」

足を動かしたり、声で威嚇したり、手で体をどかしたりと色々試してはみたが、その猫は僕の足の上から動こいつしない。手を出した途端に指先を噛まれてしまう始末だ。

「この野郎、どうしてくれようか？」

猫が邪魔で読書ができない。猫好きな人からすればとても羨ましい光景なのかもしれないが、僕は猫があまり好きではない。猫より犬派だ。猫は主人の命令を聞かずに自由勝手に行動を起こして「世界は俺を中心に回っている」とでも言いそうなあの態度が嫌なのだ。その点に比べて犬は扱いやすく人間の命令に従う優れた動物だ。救助や警察で活躍しているところがまた利口だ。救助猫や警察猫なんて聞いたことがない。

「足の上に乗るのは止めてくれ！ どうしても読書に集中したいんだよ！」

人がいないのを良い事に僕は猫に大声で叱ってしまった。誰かに見られていたらきっと笑われていたことだろう。足元の猫から離れるために僕はベンチから立ち上がって、デブのペルシャ猫から猛ダッシュで逃げた。驚いた様子の猫はあとから僕を追つて駆けて来ただが丸く太い体なので体力が長くは続かなかつた。道の途中でペタリと座り込んで動かない。

こうして僕は邪魔な猫をどうにか巻いた。にしても何であの猫は俺にくっ付いてきたのだろうか？ あんなにデブ猫に好かれるようなことは一切していないのに？

僕はさつままで座っていたベンチがある位置から湖を半周して、向こう側に当たる位置にある同じ木製のベンチの上にある枯葉を手で払つてから座つた。これは立派なデジヤヴというものだ。それから猫の一件を忘れようと本に集中した。この『十二番目の天使』と

いう本はどうやら野球をやる子供の親の話の様だ。始まつて早々に主人公が自殺しそうになつてゐる所から本の物語に引きこまれていった。続きがきになり次のページをめくつた途端にアイツはやつて來た。ベンチの後ろにある茂みの中から茶色の塊が突然、勢いよく飛び出してきた。それは僕が走つてまで追い払つたあのペルシャデブ猫であつた。

「おいおい…もう足の上には乗るなよ」

僕は一度現れたその猫に精一杯のキツイ視線を送つた。それをものとしないデブ猫はさつきの体力からは考えられない程に素早い動きでベンチの上に登り、どういう訳か僕の膝の上に自分から乗つたつて來た。茶色い抜け毛と茂みの葉っぱが黒いポロシャツにくつ付いてくる。汚れが目立つので、早急にどかそと両手で猫を持ち上げると、デブ猫は僕の膝の上で力の限りに暴れて、僕の手を巨体で振り払つた。それに加えてこの猫は想像以上に重たかつた。この猫はこんな体でよく動き回れるなど本氣で感心してしまう程だ。

我儘なデブ猫をどうやってどかそとかと必死に考えている最中に、遠くから聞き覚えのある声が聞こえた。この声はあのAさんの声だつた。僕が手を振ると散歩中のAさんはペットのゴールデンレトリバーと共に僕が座つている木製ベンチへやつて來た。

「M君が1人で公園にいるなんて以外だね…あれ？ それ、猫だよね！」

「うん、そうだよ。猫だよ」

他に何だつて言つたのだろうか？ どうみても間抜け面の太い猫としか言いようがない。

「可愛い～！ 私、猫大好きなんだよね～！」

「犬は好きじゃないの？」

「両方とも大好きなの！ 動物なら何だつて好きなの！」

そんな動物大好きなAさんは、僕が密かに惚れている女性の1人であつた。

同じ剣道部に入部している容姿可憐な美少女である。元気で明るく

純真な彼女の虜になってしまった人は後を絶たない。恥ずかしいながらも僕もその一人だつた。それが目的で剣道部に入り彼女と仲良くなつてからその魅力はまた一段と増して行つた。そしてAさんがあの馬鹿みたいに入学困難な高校に受験すると言いだしたので、僕もAさんを追うように第一志望をその『F高校』にした。Aさんと一緒になるなら先生から出された課題の山も塾の宿題もどんとこいであつた。そうして両親が加わつて今に至る。

「ペルシャ猫だよね。これってM君のペットなの？」

ここでAさんと距離を縮める為に僕は、このデブ猫を利用して嘘をつこうと考えた。

「そうだよ。『リック』つていう名前なんだよー！」

「へえ～変わった名前だね」

慌て『十一番目の天使』に出て来る主人公の息子の名前をデブ猫につけてしまつた。そのデブ猫はヘラヘラと笑う僕の顔をジッと見て呆れた様に大きな欠伸を搔いていた。

「そういえばM君つてあの『F高校』に受験するんだよね？」

「え？……そうだけど、何でそんなこと今聞くの？」

Aさんから予期せぬ質問を受けた。『F高校』のことは忘れていたかつたけど、Aさんとの会話を続ける為には言つしかないのだろう。「僕は貴方と同じ高校に行きます」と。

「実は私も『F高校』にしようかなつて思つていたんだけどね、先生に相談したら私の成績じゃあとても無理だろうつて言われちゃつて…それで『F高校』の受験は諦めたの」

「ええ！？ それじゃあ『F高校』やめるのー？」

驚愕のあまり、ベンチから腰を上げようと体が勝手に動き出した。だが、膝の上で堂々と横になるデブ猫の体重に負けて、僕はベンチに座つたままAさんの顔を凝視した。

「いや、そんなに驚かなくても…」

確かにそこまで驚くことではない。でも自分の積み上げてきた努力の意味が、Aさんのたつた一言によつて見事に粉碎されてしまった、

という事実への驚きは隠せなかつた。

「M君はどここの高校に受験するの？」

「僕の第一志望は『F高校』になつてゐるんだけど…」

頭の中で積み上げて來た今までの努力の意味は、Aさんの思いもしない言葉の一撃によつて木端微塵に碎け散つて綺麗に去つて行つてしまつた。

「M君すごいじゃん！　がんばつて！　応援するね！」

「ああ……ありがとう…」

そう言い残すとAさんは、話が終わるまで律義に待つていてくれたゴールデントリバーを連れて軽い足取りで僕の前から遠ざかつて行つてしまつた。

数ページから全く進んでいない本に、今も僕の膝の上で横になつているデブ猫と、勉強に対しても机に向かうこともしないで一日が終わるだらう。『F高校』への入試は取り止めにして、もっと簡単に入学できる高校にしようかな……？

そう考える僕の膝の上でデブ猫はまたしても大きな欠伸を搔いた。

本を読む気が起きない。ベンチから立ち上がる気力がない。膝上の猫を動かす行動力が全く出ない。このまま家に帰つても机に向かうこともしないで一日が終わるだらう。『F高校』への入試は取り止めにして、もっと簡単に入学できる高校にしようかな……？

呑気な猫につられて俺も猫程ではないけど大きな欠伸を搔いた。目から流れた小さな涙が僕の頬を伝つて落ちていく。欠伸をした後に流れる涙はどうにも好きになれない。意味もなく（生体的な意味とは別として）現れては消えていく涙。そう考えると欠伸の後の涙はどうにも余分な物でしか感じられない。僕は嫌いな涙を服の袖で脱ぐつてから手に持つている本に目を移した。

「あら、アンタそんな所に居たのね！」

その声は本に移る目と同じタイミングで聞こえてきたのだ。野太い

声に似合う体格の女性が僕のベンチに向かって歩いてくる。そして僕の膝の上で横になるデブ猫をいとも簡単に持ち上げてしまった。それを見た僕は驚きのあまり大きな声が出てしまった。

「ごめんなさいね… 読書の邪魔になっちゃったでしょ？ 全くこの子つたら…」

こんな時に「とても邪魔でした」と素直に伝えられないのが僕だ。「そんな事ないですよ！」と笑って嘘をついた。女性に持ち上げられているデブ猫の細い視線が僕を見つめる。

「相手してもらつて良かつたはね… さあ、お家に帰りましょうね、リックちゃん」

「ええ、『リック』ちゃん！？」

なんとそのデブ猫の名前は本当に『リック』という名前だった。聞けば名前の由来は読書好きの親戚から付けてもらつた名前だという。もしかして、この猫の名前つて……

「この本から取つた名前ですか？」

僕は『十一番目の天使』という本を女性に見せた。けれども女性の方は本に興味がなく、実際にその親戚の人が猫の名前を本から取つて付けたのかは分からなかいそうだった。

「でも、もしかしたら、そうかもしれないわね…」

と女性は一言のこしてから僕の前を去つて行つた。あのデブ猫とはさよならの一言もなく別れた。勝手に現れては勝手に消えて行く。まるで欠伸の涙そのものだ。「だから僕は猫が嫌いなんだよ」と1人残されたベンチの上で小さく呟いた。

おわり

(後書き)

注意　この話でてくる少年とは作者のことではありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6511y/>

本と猫と少年と、

2011年11月20日04時09分発行